

## ドキュメンタリーDVD 上映会&講演会 IN 愛知(5)

DVD 上映、講演に続いて「意見交換」の場に。会場から多くの人が手を挙げた。発言が多くなければ、私も挙手しようと構えていたが、その機会はなかった。残念というより嬉しかった。

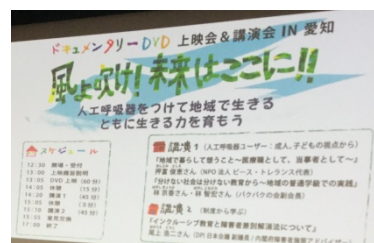
とりわけ印象に残ったのは、障害をもつ子どもの父親による今後の進路についての悩みの発言。これに対して、共催団体の一つ、名古屋「障害児・者」生活と教育を考える会から、定期的に開催している相談会の案内などがあつた。名古屋市の障害者支援に携わる人から、自らの仕事と関わらせて現状と課題が話された。会場には、こうした行政の現場、学校や施設の関係者も多数参加されていた。障害当事者や家族、そして地域住民、行政との「交流の場」が広がることを期待する。このほか医療と福祉の関係、在宅ケア、生活支援のあり方などが意見交換された。

今回の企画について、私なりの「感想」を述べよう。昨年12月3日「みんなの学校」上映会&講演会に続く企画で、「バクバクの会」を中心に準備されてきた。「わっぱの会」や名古屋市立大などと共催し、参加者は前回より多く、260名余り。多様で若い人の参加も多かった。こうした草の根からの取り組みが、名古屋・瑞穂の地の大学を会場に開催されたことは意義深い。

「人工呼吸器をつけて地域で生きる」実像に迫るDVD上映、それに続く「人工呼吸器ユーザー」と「制度から学ぶ」という講演が絡みあい、それが意見交換にも反映していた。まずは障害者問題に関心をもつこと、立ちはだかる障壁について考える、一つの「きっかけ」になったと思う。災害などと一緒で、「わがこと」として考えることだ。

予定していた発言は、障害をもつ子と「ともに学ぶこと」の大切さ、意義について。地域の学校に通う林京香さんと級友たちの姿を見てきて、つくづく感じる。今回の企画からも、最初から分けないで「ともに学び、ともに育つ」インクルーシブ教育の意義を再確認できた。私は「京香さんらを光に学んでいる」と発言するつもりだった。

集いのあと、朝日新聞2月27日朝刊「インクルーシブ教育 内海千恵子さんに聞く」を思い出した。内海さんは語る。「障害のある人たちと関わる機会がないと、特別な存在だと思い込んでしまう。差別や偏見は「分ける」ことから生まれると思います。幼いころから障害のある人がいる環境に育てば、差別や偏見は少なくなるはずです。本来のインクルーシブ教育がやはり大事だと思います」



(2017年7月1日)